



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

言語力を高めるための指導法：
在外教育施設における言語活動の充実を目指して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富永,佳美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174240

言語力を高めるための指導法

— 在外教育施設における言語活動の充実を目指して —

前シドニー日本人学校 教諭

高知県高知市立江陽小学校 教諭 富 永 佳 美

キーワード：在外教育施設，日本語力，国語科，言語活動

1. はじめに

オーストラリア，シドニーの中心部シティーから郊外へ向け車で約1時間の緑豊かな地に，シドニー日本人学校がある。広いグラウンドを有し，近隣の牧場から馬のいななく声が時折響く学び舎。2009年4月から3年間，私はシドニー日本人学校での勤務という貴重な機会を得た。この，英語圏にある在外教育施設での日々は，日本語の習得の在り方，日本語力を高めるための指導法を模索する3年間であった。初年度の取組みを中心に，以下にその概略を記す。

2. 指導の実際

赴任1年目，私は小学部1年生の学級担任となった。担任した児童の言語に関する背景は様々であった。日本から初めて渡豪したばかりの児童，保護者の転勤で海外生活の比較的長い児童，永住権を有し日英のバイリンガルの児童等。日本語にどれだけ接してきたか，また現在接しているかによって，日本語（国語）の理解と習熟，活用力は様々であった。児童個々の実態に応じて，これまで勤務してきた本邦での学校での指導法とは違ったアプローチの必要性に，私は直面した。国語科の指導だけでなく，特別活動（学級活動・学校行事）や道徳の時間も含め，児童の言語活動の充実を目指し，その在り方を模索した。

国語科を中心とした言語活動

<1学期>

(1) 絵カードの活用

「ひらがなことばカード」「ぶんカード」「のりものカード」「しりとりカード」

- ・日本語と英語の理解の差を埋めるツールとして
- ・段階的な指導が可能であるメリットを生かして

絵と事象がつながる⇒正しい発音を聞く⇒正しく声に出して読む⇒正しく書ける⇒語彙量が増えて，日記・作文等の文章を書くときに適切に使える

(2) 絵や写真に文を添える活動（国語・図工・生活の授業で）

- ・「こんな木あったらいいな」
- ・「シドニー日本人学校 お気に入りの場所」

(3) ゲーム的な要素を取り入れて

ゲーム例：「ばくばくなあに？」 ←正しい口形のトレーニングとして

「はこの中なあに？」 ←質問力を鍛える

「ジェスチャーゲーム」 ←非言語で伝える楽しさ

・学級通信でゲーム内容を伝え、家庭でも楽しんで取り組んでもらう。

(4) 平仮名の定着度調査実施とそれを生かした学習の個別化

- ① 市販テストワークを活用して、平仮名の「読み」「書き」定着度を複数回調査する。(5月と6月に調査)
- ② 国語の授業等で練習時間をとる。
- ③ 家庭に通信・連絡帳等を通して個別に定着度を知らせ、家庭での支援を依頼する。
- ④ 宿題プリントを個別化する。(個々の課題克服型)
- ⑤ 学期末に再度、平仮名の「読み」「書き」定着度を調査する。(個別に)
- ⑥ その結果を期末懇談で保護者に報告する。(家庭での支援依頼)

<2学期>

(1) 書く活動(文章に絵を添える)

- ・日本の親戚や友達に絵手紙を書く。
- ・お話作文(聞きとり作文) ⇒ なぞり書き作文 ⇒ (自力で)作文
⇒学校文集「ユーカリ」原稿(20マス×8行)仕上げをめざして

(2) 読む活動(群読的要素を取り入れて語のまとまりや言葉の響きを意識して読む)

- ・昔話等の物語文を音読して演じる。『おむすびころりん』『大きなかぶ』

(3) 話す活動(話す事柄を順序立てたうえで話す)と聞く活動(感想や質問を述べる)の連動、および“対話”へとつながる話型の習得(基本話型を知る)

- ・『みんなにしらせたいこと』『2学期のとおきニュース』の題材で、「はじめ」「なか」「おわり」の色別カードに書いて話す。
- ・友だちの発表を聞き、感想や質問を述べる。
- ・基本話型の指導スタート
「同じです。」「他にあります。」「～です。そのわけは～」「〇〇さんと違って～」等

(4) 片仮名・漢字の習得

- ・片仮名の字画は、漢字の字形の基礎練習になることから、片仮名の組合せとして漢字習得を意識づけながら指導をする。家庭にも連携協力依頼。

<3学期>

(1) 書く活動(目的に合った文を書く)

- ・『あつまれ、ふゆのことば』⇒夏の言葉集め⇒“シドニー夏かるた”づくり
- ・作文を書く活動を毎週の前半に定例化してとる。

(2) 読む活動(言葉の響きを楽しんで読み、交流する)

- ・『あめふりくまのこ』『どうぶつ村のおんがくかい』、学級の音読詩集『みんなのうた』を題材に、詩の音読を日常化する。

- (3) 話す活動（伝えたいことを落とさずにまとめたうえで話す）と聞く活動（感想や質問を述べる）の連動
- ・『しらせたいな、見せたいな』を題材に、相手と目的を明確にしたうえで伝えたいことを文章化して話す。家庭にも協力依頼。

特別活動（学級活動）および道徳を関連づけた単元構成

<1学期>

(1) 特別活動（学級活動）との関連

- ・朝の会での話す活動を通して…「健康チェック」「お話タイム」
- ・当番活動の定着をめざして…日直当番の仕事のトライアルとしての係の設定
(教科係・朝の会係・帰りの会係)
- ・学級集会の“一人一役”を通して…「お楽しみ会」2回、「七夕集会」1回実施
(転出入に伴い「歓迎会」「お別れ会」各1回実施)

(2) 道徳との関連

- ・障がい理解教育を通して…「のろまなローラー」「わたしたちのトビアス」

<2学期>

(1) 特別活動（学級活動）との関連

- ・当番活動の発展をめざして
教科係（号令とその教科についての世話が仕事内容。希望の教科を固定制で。）⇒組み直して2学期も継続。
朝の会係と帰りの会係
⇒2学期からは合併して日直当番の仕事として位置づけ、輪番制に。
- ・朝の会の話す活動を通して
「お話タイム」では、具体物を手に持ってみんなの前で話す活動を中心に行った。
- ・学級集会での“一人一役”を通して
「お楽しみ会」1回、児童転入に伴い「歓迎会」1回実施。

(2) 道徳との関連

- ・障がい理解教育を通して…「さっちゃんのまほうのて」

<3学期>

(1) 特別活動（学級活動）との関連

- ・係活動の発足
話合いの時間確保を続けた結果、「生き物係」「黒板・ホワイトボード係」「お知らせ係」等、児童の創意工夫から係活動が発足した。
- ・学級集会を通して
共同制作活動等を楽しむ場として、「クリスマス集会」1回実施。

(2) 道徳との関連

- ・『いいところさがし』構成的グループ・エンカウンターの要素を取り入れ、3時間構成で取り組んだ。

学校行事等の場で

- ・キンディーオープンデーでのパフォーマンス（音読劇「おむすびころりん」）
- ・日本人学級集会での発表、他学級での発表（音読劇「大きなかぶ」）

3. 実践を振り返って

言語力育成へ向けての基盤づくりとして、1年生のできるだけ早い段階で、児童個々の国語（日本語）に対する理解度の把握を試みた。絵や写真等の視覚要素、言葉遊びゲームのような音声言語を用いて、楽しみながら言葉に触れる場を多くとった。そして、ひらがなの定着度調査を実施し、個々の平仮名の「読み」「書き」の定着度を調べた。家庭環境から英語優位な児童も複数おり、個別支援ニーズの高い児童も同時に在籍していた。言語に関する児童個々のアセスメントは、とりわけ1年生段階ではきめ細かに行っていく必要があると感じた。

音声言語中心の活動から入り、“したこと”“感じたこと”“考えたこと”，何でもいいから話してみようと呼びかけた1学期を経て、2学期からは内容を考えて書いてから話す活動、聞き手や内容を意識して話す活動を取り入れた。「話す」ことが一定軌道に乗った段階で、話した内容を教師が書きとめた聞き取り作文から、それを“なぞり書き”プリントに直したなぞり書き作文と段階を踏みながら、書くことに対する苦手意識の緩和に努めながら、作文活動を進めた。「聞く力」に関しては、おもに話す活動に連動させて、質問や感想を述べる（書きとめる）活動を年間継続してとった。また、年度後半には、たずねたり応答したり、グループで話し合っって考えを一つにまとめたりする場を設けた。

年度当初、国語に対する苦手意識を持った児童が多いという印象を受けた。日本国内に比べ、日本語に接する機会の格段に少ない環境の中、国語科授業に対して、日常の話し言葉とはまた違った難しさを児童は感じるのである。学習が進むにつれ、活動の中楽しさを見出す児童が増えていったことは、喜ばしいことであった。

就学開始時期である1年生の段階は、授業を通した言葉との本格的な出会いの時と言える。児童にとっては、自身の言語力に否応なく対峙させられる時でもある。在外教育施設という本校の特色から、本学級の児童も、言語を国語（日本語）と限定した時、理解・習熟のばらつきが出てくる。言葉の意味だけでなく、修辞法、語のリズムや抑揚等、児童個々にハードルは様々である。児童によっては、学校に登校して朝一番の「おはようございます。」の挨拶一つとっても、日本語のトレーニングになる場合もある。日本人学校は、ある意味、学校生活全体が“言葉の教室”であると感じた。正しい日本語、美しい日本語を伝え教えるという、在外教育施設の責務を感じた初年度であった。

4. 終わりに

シドニー日本人学校は、小学部に国際学級を併設している。日本人学級の児童生徒対象のEFL（現地英語）と、国際学級児童対象の日本語学習を、言語科の現地採用教員が指導している。日本語と英語が飛び交う学校環境の中で、私は、“日本人学校だからこそ”日本語（国語）の指導が充実する必要性を痛感した。英語圏であることから現地校志向は根強いが、保護者が日本人学校に期待するのは、英語の上達とともに日本語（国語）の十分な理解・習熟ではなからうか。私に多くの気づきを与えてくれた、日本人学校での上司、同僚、保護者、そして子どもたちに、感謝の気持ちを伝えたい。